

## 西洋形船船長運転手機関手免状規則時代（明治時代）

西洋形船船長運転手機関手免状規則時代に判定のあった重大海難事件4件及び海員審問は行われなかったが「東洋人の差別」として当時の世論を沸かせた、ノルマントン号沈没事件などを掲載しています。

### 1 ノルマントン号沈没事件

英国商船ノルマントン号（積量3,000トン、2本マスト）が、乗客及び乗組員約60人と茶、覆盆子、海草など約600トンを積載して、明治19年10月23日横浜港を出帆し、神戸港に向う途中、翌24日午後8時ころ潮岬附近の暗礁に触れて船体が破損して沈没した。

同船船長（英国人）の指揮によって乗組員は避難したが、日本人乗客25人は全員船内に残されたまま非業の最後をとげた。また、インド人及び中国人の火夫12名も避難中にでき死した。

乗組員の英国人は、自過失によるでき死者1名を除き、全員助かったにもかかわらず、日本人乗客をはじめ乗組員のインド人及び中国人など、東洋人のみはその犠牲となったことは、「東洋人を人種的に差別しあつかも動物視している」として当時の世論を沸かせた。

本件は、神戸英国領事館において海事審廷が開かれ、「十分に船長としての職務を尽くし、当時の処置は全く当を得ていた」と判決した。

このことは、一層国民感情を悪化させ、政府においてもこの問題を憂慮したが、当時外国人は治外法権下にあるため我が国の治罪法を適用することはできなかったため、管船局長は、兵庫県令を告発人として、船長を神戸英国領事裁判所に告発させた。

そこで、神戸英国領事館は、明治19年11月16日より4日間予審廷を開き、日本側弁護人等が列席するなか審理を行い、船長を有罪と認めた。

さらに、本件は、横浜駐在英國領事館へ移され、内外の新聞記者、法学士等100余名が傍聴するなか同年12月7日開廷され、陪審官の決議を経て有罪と判決言渡しがあった。

本件は、まれにみる社会的重大事件として騒がれたが、これは、とかくヨーロッパ人が東洋人を軽蔑して同等視しなかったことへの、日頃の鬱積が爆発したものであった。また、英国人の中にも船長のとった措置を英国海員の面目を汚すものとして非難する者があり、当時の識者の間でもこの事件を憂慮して、種々の議論がなされた。

### 2 汽船三吉丸汽船瓊江丸衝突事件

汽船三吉丸（97トン）と汽船瓊江丸（77トン）とが明治24年7月11日02時45分ころ北海道白神岬南方約1海里半の海上で衝突し、その結果、瓊江丸は瞬時に沈没し、同船の乗客及び船長以下乗組員合わせて261人が死亡した。

事件発生後2か月余りの同年9月21日、函館船舶司検所において、判定された。

### 3 汽船出雲丸沈没事件

汽船出雲丸（446トン）が、明治25年4月5日朝鮮南岸所安群島付近において暴風のため暗礁に乗り揚げて沈没し、船客28人と乗組員26人が行方不明となった。

東京船舶司検所で海員審問に付され、同年6月29日判定された。

#### 4 汽船ラベンナ軍艦千島衝突事件

英国籍のラベンナ（1,916トン）と帝国軍艦千島とが、明治25年11月30日、伊予国興居島海峡で衝突し、その1分後に千島が沈没、乗組員74人が死亡した。当時、ラベンナには水先人が乗船していた。

長崎船舶司検所は水先人の審問を直ちに開始し、同年12月12日審問調書を、同月14日審問廷の意見書を通信大臣に提出した。

また、横浜の英国領事庁がラベンナ船長を審問したので、審問口供書謄本を入手しようとしたが拒否され、そこで、口供が掲載された英字新聞を入手するなどし、翌明治26年4月1日判定された。

#### 5 汽船尾張丸汽船三光丸衝突事件

沖縄航路貨客船尾張丸（656トン）と細島航路貨客船三光丸（198トン）とが、明治30年2月4日伊予国脇村鼻北方で衝突し、三光丸は沈没し、同船の旅客51人及び乗組員12人ができ死した。

同年6月28日大阪船舶司検所で判定がされた。

#### 6 汽船金城丸汽船バラロング号衝突事件

英国のバラロング号（4,192総トン）と軍用船金城丸（2,038総トン）とが明治38年8月22日瀬戸内海姫島灯台付近で衝突し、その結果、金城丸は瞬時に沈没して旅客及び船員41人ができ死、124人が行方不明となった。

また、その遭難者の多くが日露戦争においてかくかくたる武勲をたて、上陸地である宇品も間近くその喜びにひたっている矢先の海難であったから世間の同情をひき、しかも相手船が外国船であったところから、それだけ重大な事件としてけん伝された海難である。

本件は、海員審判に付され、翌39年1月29日東京地方海員審判所で第一審裁決があったが、理事官及び被審人から控告がなされ、同年5月18日高等海員審判所で裁決があった。

#### 7 汽船秀吉丸汽船陸奥丸衝突事件

客船陸奥丸（914総トン）と秀吉丸（696総トン）とが明治41年3月23日恵山岬灯台の北東方1海里半の海上で衝突し、その結果、陸奥丸は沈没して旅客199人、船内郵便係員1人及び船長以下乗組員11人がいずれも行方不明となり、旅客1人ができ死した。

陸奥丸は、明治10年7月に英国のグラスゴーにおいて進水した鉄製の客船で、当初、横浜・萩の浜間の航路に従事していたが、当時としては速力が速く、乗り心地もよいとの評判を得ていた。

本件は、海員審判に付され、明治41年5月23日東京地方海員審判所で第一審裁決があったが、理事官及び被審人から控告がなされ、同年10月9日高等海員審判所で裁決があった。

#### 8 汽船三浦丸乗揚事件

沖縄沿岸航路に就航中の貨客船三浦丸（140総トン）が明治43年10月11日、暴風のため三重城燈台の北西約半海里の沖合の暗礁に座礁して乗組員4人と旅客34人ができ死し、旅客3人が行方不明となった。

本件は、海員審判に付され、翌44年12月20日長崎地方海員審判所で裁決があった。